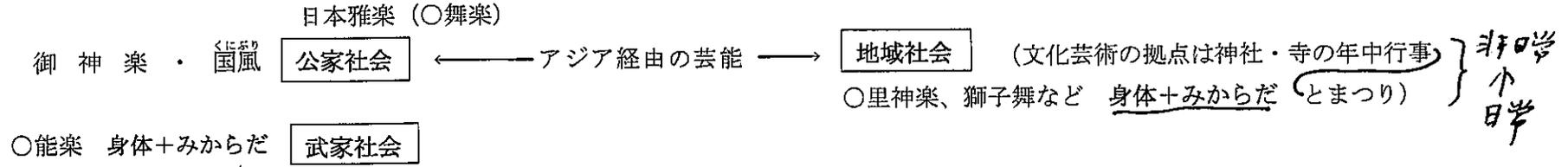
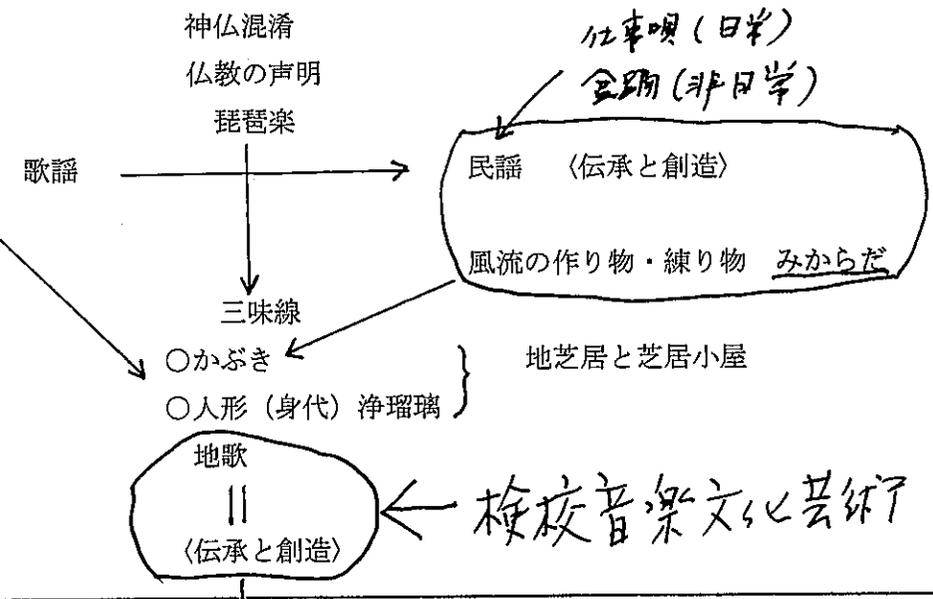


日本伝統芸能—日常と非日常から見る身体表現(パフォーマンス) —

身体 ・ みからだ から探る生き残った伝統芸能の核 ○舞台芸能=非日常
|| 人類共通 || 日本アイデンティティー

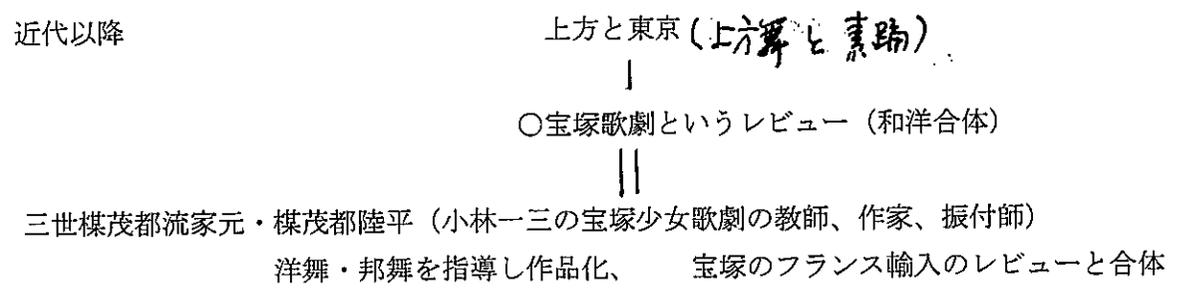


アジア



江戸時代まで

ヨーロッパ



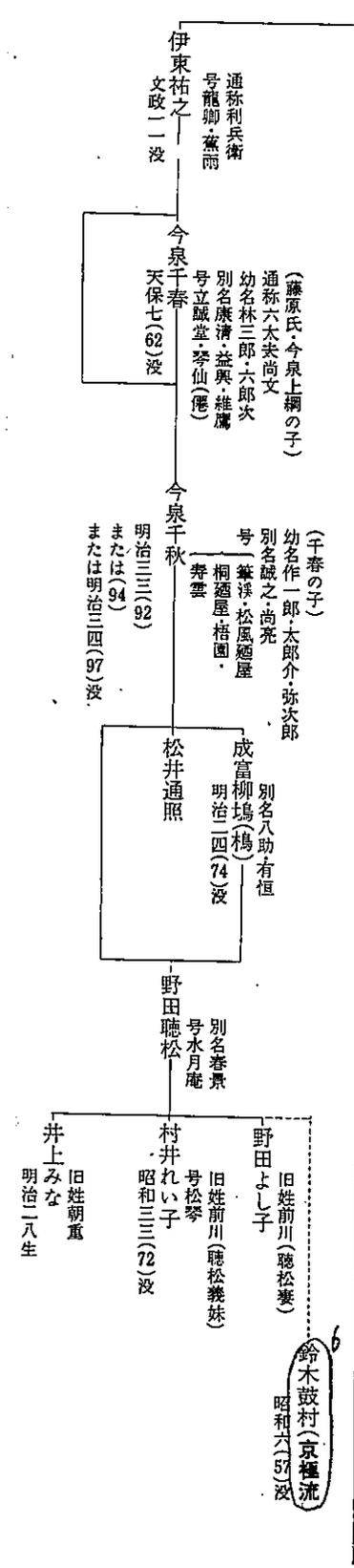
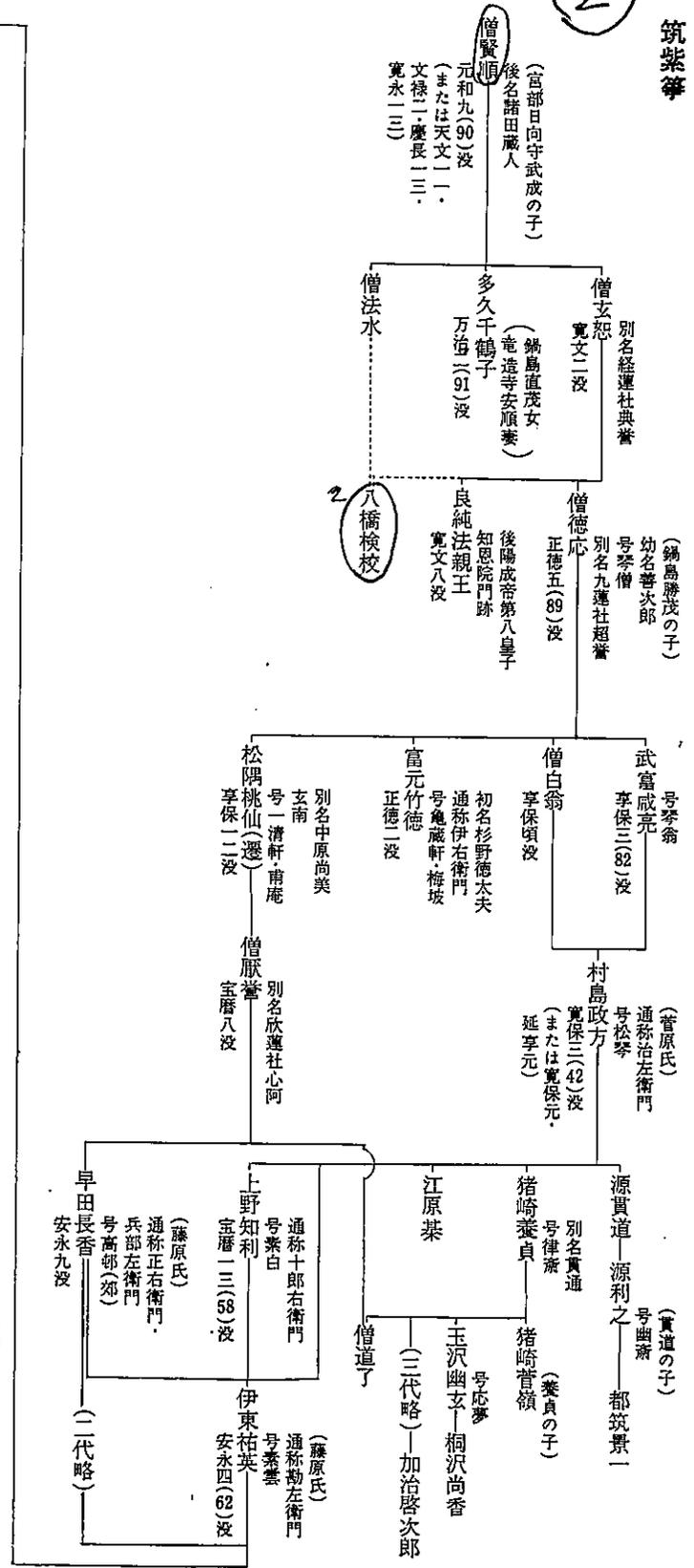
作製 平野英彦

等

↑ 日本 アジア経由 雅楽の楽等(中七)

筑紫等

2



注 アジア経由 日本雅楽の楽琵琶

一、琵琶 一平家、音僧に 檢校多数

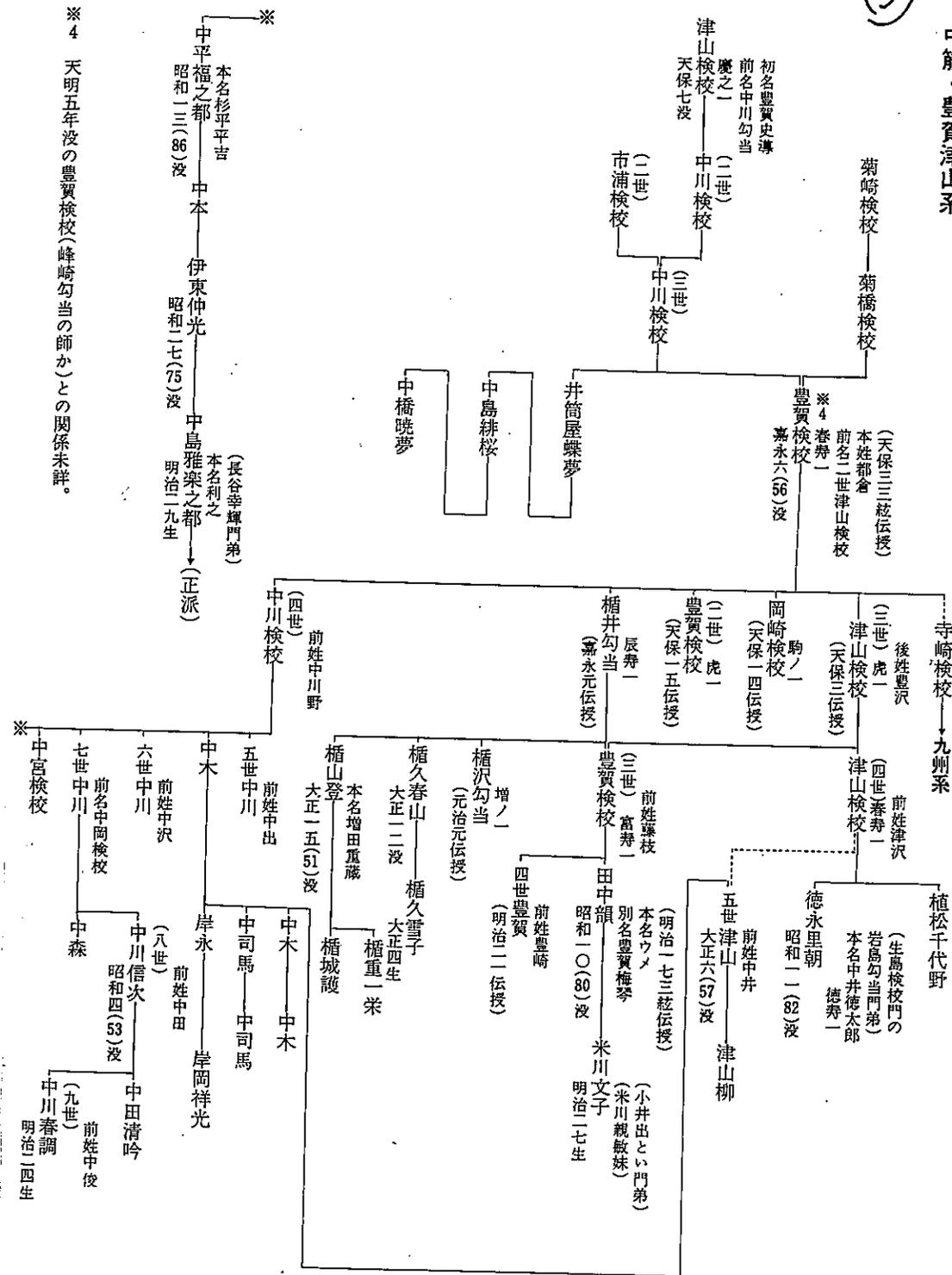
三、僧 眞順 (1537? / 1623?) 久留米市に1994年あり 眞順記念全国琴曲祭 コナール

三、石村 檢校 (?) / 1642) 三味線組歌の創始者、胡弓・三味線↑琵琶法師

四、八橋 檢校 (1614 / 1685) 琴曲組歌、和もの作曲者、胡弓、三味線の名手

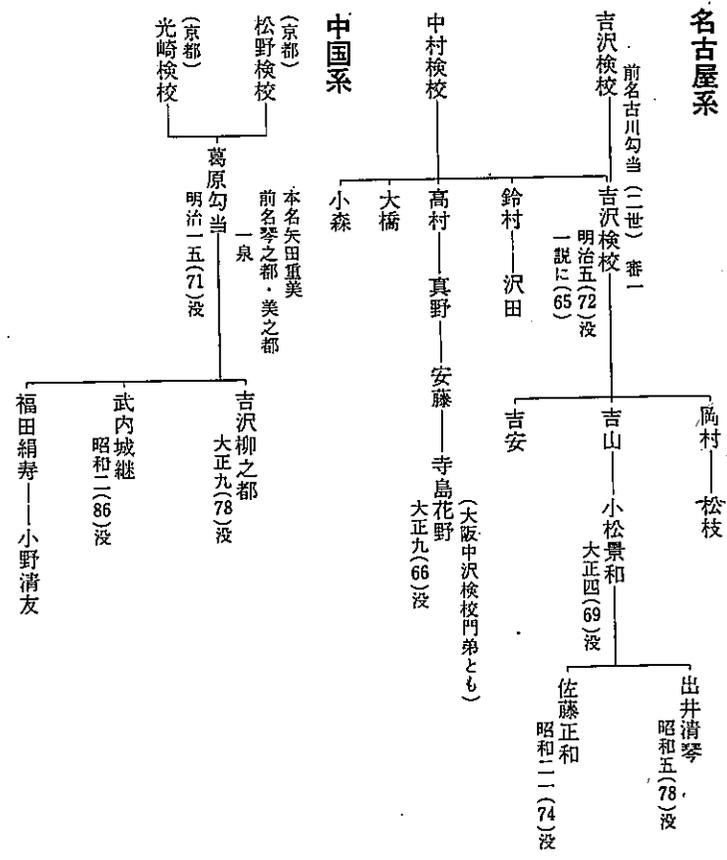
檢校音楽文化芸術 参考資料 『演劇百科大辞典』巻6 巻末表より (534、早大演劇博物館会誌刊)

5

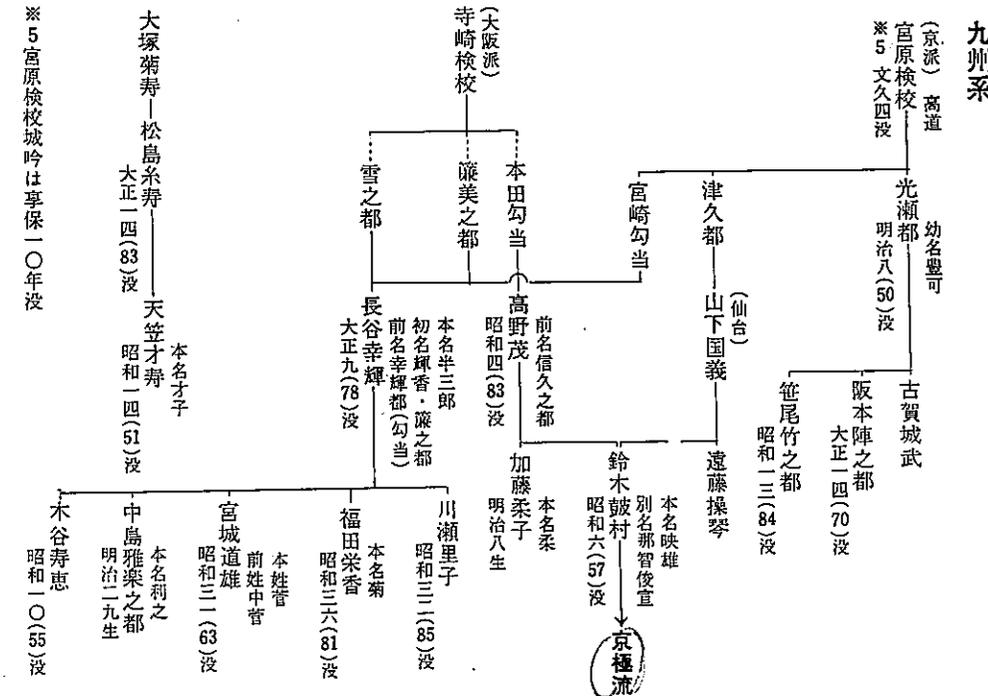


※4 天明五年没の豊賀檢校(峰崎勾当の師か)との関係未詳。

名古屋系



九州系



外郎売

いろいろうり

波瀬満子

●拙者親方と申すは、お立合いの中にご存知のお方もござりましようが、お江戸を発つて二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて青物町を登りへおいてなされるれば、欄干橋虎屋藤右衛門、只今は剃髪致して円齋と名乗ります。

●元朝より大晦日まで、お手に入れまするこの薬は、昔、珍の国の唐人外郎という人、わが朝へ来たり、帝へ参内の折からこの薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ、冠の隙間より取り出す。依つてその名を帝より、透頂香と賜る。即ち文字には「頂き・透く・香い」と書いて、とうちんこうと申す。

●只今はこの薬、殊の外世上に弘まり、方々に似看板を出いだし、イヤ小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のといろいろに申せども、平仮名をもつて「ういろう」と記せしは親方円齋ばかり。もしやお立合いの中に熱海か搭の沢へ湯治にお出なされるか、又は伊勢御参宮の折りからは、必ず門違いなされまするな。お登りならば右の方かた、お下りなれば左側、八方が八つ棟、表が三つ棟、玉堂造

り、破風には、菊に桐の蓋の御紋を御赦免あつて系図正しき薬でござる。

●いや最前より 家名の自慢ばかり申しても、ご存知な方には、正身の胡椒の丸呑み、白河夜船。さらば一粒食べかけて、その気味合いをお目にかけてましよう。先ずこの薬をかように一粒舌の上のせまして腹内へ納めますると、イヤどうも言えぬは、胃・心・肺・肝がすこやかになつて蕪風喉より来たり。口中微涼を生ずるが如し。魚鳥・茸・麴類の食い合わせ、その外万病速効ある事、神の如し。さてこの薬、第一の奇妙には、舌のまわることが、銭独薬がはだして逃げる。ひよつと舌がまわり出すと、矢も盾もたまらぬじや。

●そりやそりやそらそりや、まわつてきたわ、まわつてくるわ。アワヤ候サタラナ舌に、か牙サ歯音、ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、あかさたなはまやらわ、おこそこのほもよろお。一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、盆豆盆米盆牛蒡、摘み蓼つみ豆つみ山椒。書写山の



江戸後期の浮世絵師、豊国が描く、外郎売り。歌舞伎十八番の内十一外郎より

社僧正。粉米のなまがみ粉米のなまがみこん粉米の小生がみ、緇子・緇子、緇子・緇子。親も嘉兵衛子も嘉兵衛親かへい子かへい子かへい親かへい。古栗の木の小切口、雨合羽か番合羽か、貴様のきやはんも皮脚絆、我等がきやはんも皮脚絆。しつ皮袴のしつぼころびを、三針はり長にちよと縫うて、縫うてちよとぶんだせ。河原撫子・野石竹、のら如来、のら如来、三のら如来に、六のら如来。一寸先のお小仏に、おけつまずきやるな。細溝にとじよによりり。京の生鱈奈良生学鯉、ちよと四五貫目、お茶立ちよ茶立ちよ、ちやつと立ちよ茶立ちよ、青竹茶せんでお茶ちやつと立ちや。

●来るは来るは何が来る、高野の山のお柿小僧、狸百匹、箸百膳・天目百杯・棒八百本、武具馬具、三ぶぐばぐ、合わせて武具馬具、六武具馬具、菊栗、三菊栗、合わせて菊栗、六菊栗。麦、塵、むぎごみ、三みむぎごみ、合わせてむぎごみ、六むむぎごみ。あの長押の長難刀は誰が長押の長難刀ぞ。向こうの胡麻がらは在のごまがらか真ごまがらか、あれこそほんの真胡麻殻。がらびいがらびい風車。おきやがれこぼし、おきやがれ小法師、ゆんべもこぼして又こぼした。たあぶぼぼ、たあぶぼぼ、ちりからちりからつたつたつた。たつたつたつた千だこ、落ち

.....外郎売 ういろうり.....

たら煮て食お、煮ても焼いても食われぬ物は、五徳・鉄灸金熊童子に、石熊・石持ち・虎熊・虎きす。中にも東寺の羅生門には、茨木童子がうて栗五合、つかんでお蒸しやる、彼の頼光の膝元去らず。

●鮎金柑 椎茸・さだめて後段な、そぼ切り、そうめん、うどんか愚鈍な、小新発知。小柵の小下の小桶にこ味噌が、こ有るぞ、小杓子こ持つてこ掬つてこ寄せ、おつと合点だ、心得たんぼの川崎・神奈川・程が谷・戸塚は走つて行けば灸を摺りむく三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして早天早々相州小田原とうちん香。隠れござらぬ貴賤群衆の花のお江戸の花いろいろ、あれあの花を見てお心を御和らぎやという、産子、這う子に至るまで、此の外郎の御評判、御存知ないとは申されまい、つぶり、角出せ棒出せ、ほうほうまゆに、白・杵・すりばち・ばちばちぐわらぐわらぐわらと羽目を弛して今日お出の何茂様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、息勢引つぱり、

東方世界の薬の元締め、薬師如来も照覽あれと、ホホ敬つていろいろはいらつしやりませぬか。



作...波瀬満子

メニューー歌舞伎

波瀬満子



すうどん にくうどん
てんぷらうどん
もりそば かけそば さるそば
のりまき ゆばまき げそまき
だてまき てつかまき
たまごのふとまき
ふぐちり とらちり たらちり
かまめし かばやま
かきぞうすい
あんかけ あつあげ あずまがゆ

●講談調で

●歌舞伎調で

●のりと風に

●謡曲調で

ふふふ ゆどうふ
ふふふ いりどうふ
ひひひ ひややっこ
にぎりずし まぐろ あかがい
こはだ しゃこ たこ いか
あなご あわび うに えび
西、ごもくずし
東、にぎりずし
はっけよい
のこった のこった のこった
のこった のこった
西、ごもくずしのかち
のっぺいじる
ぬっぺいじる すましじる
なっとうじる とろろじる
なめこじる

●笑って

●短歌朗詠調で

●相撲の
呼び出し風に

●お経風に

せんばじる さんべいじる
たぬまじる
うのはな たくあん
きんぴらごぼう
たん はつ しろ れば
すずめやま
チチンテトシンシャン
わかどりのからあげ チチンテン
いやさ かつばまき
ささえのつぼやま
ちゃわんむし
あーい
すっほんぞうすい
しゃぶしゃぶ とろろそば
やながわ あつもり
やながわ やながわ

●おぼたら経で

●長唄風に

●歌舞伎男役の
台詞回りで

●歌舞伎
女方風に

●男役女形
交互に

あ あ あつもり
かにすき うおすき うどんすき
すきすき すきやま
こいこく
まもすい ふぐまし とりまし
ぎゅうまし さしまし いかまし
うなじゅう てんがく
てつばんやま
かつおたたき あじたたまき
くじらたたき
いかめし とりめし やきめし
ハイ ごっつあんてした

●濡れ場風に

●貝茶を切って

●お化け風に



風流の作り物・繕り物は 日常から非常へかたのまつり

1. 田楽系

671 天皇の田舞
雛子田 ⇨ 田植踊
田遊び

922 田楽 ⇨ 田神 ← 疫神送り
法師の登場 ⇨ 猿楽法師
田楽 + 風流

10C 後半 田楽躍

1092 永長の大田楽

趣向 美しく飾る → 山車・傘 → 操り 町衆も
創意工夫 数寄をこらす
(アート)

田楽躍 → 雛

2. 風流系

8C 『万葉集』 先人の遺風
905 『古今和歌集』 上品で優雅
↓ 牛頭天王 (外国神)

894 祇園会 ← 疫神送り ⇨ 地震 雷 火事 害虫
9C 半～末 新らしい都市のまつり (崇り = あがめる)
雛 ⇨ 立つ 拍
山 (造物) 手を拍く (拍手)

シンボリック

室町期

盆行事 + 風流

祖霊信仰、祖先供養

夏祭 火 = 招魂

精霊棚 灯籠 供物

流 = 送魂 etc

11C 芸能と結びつく

京都・奈良の

→ 山車・傘 → 操り 町衆も
14C 『太平記』 「例の婆娑羅に風流をつくして」

↓ バサラ 地方大名
↓ (過差) = 華奢 (きゃしゃ) ・花車・華車
↓ 家臣団や町民たちに資金

風流拍物 ←

風流踊 → 出雲おくにのカブキおひつ

1604 豊国祭礼

かぶき者の歌舞妓

3. 孟蘭盆経系

7C 半

作物——秋 ⇨ 7月15日盆行事

力 / 釈迦の弟子の目連尊者が

餓鬼道の母を救う仏教説話

孟蘭盆会

939 空也の踊念仏 (漂泊の僧)

鎮魂の念仏

祖霊信仰

13C 一遍の踊念仏

踊躍歓喜

「称名・踊躍する = 即仏」

念仏 + 風流 壬生狂言

延年 + 風流 狂言風流

盆風流

念仏風流

平野英俊著 『評論 日本身体表現史 - 古代・中世 -』
「おひつの盆経図」より

茶音頭 (ちやおんど) (地唄)

世の中に勝れて花は吉野山 紅葉は龍田茶は宇治の 都の辰巳
 それよりも 廓は都の未申 すきとは誰が名に立し 濃茶
 の色の深みどり 松の位に競いては 圃と云うも低けれど
 情は同じ床飾り かざらぬ胸の裏表 ふくさ 捌けぬ心から
 聞けば思惑ちがい棚 逢うて何してこう筈の 柄杓の竹は直
 なれど そちは茶杓のゆがみ文字 憂さを晴らしの初昔 む
 かし話の祖父婆と 成まで釜の中冷ず 縁はくさりの末長く
 千代万代へ

廿七と紅葉と季節

宇治と都と島原地名

掛けとびりすき、立し、色の深みどり、松の位、圃、床、ふくさ 捌けぬ
 なくし 〃ちがい棚、こころ、柄杓、茶杓、初昔、釜

【解説】

六下り手事物。「茶の湯音頭」「茶尽し伊勢音頭」とも。菊岡校作曲。箏手付は八重崎校。明治三(一八七〇)年刊「新うたのはやし」初出。歌詞は俳人横井也右作詞の伊勢音頭「女手前」を縮約したもの。「女手前(女点前)」は、伊勢屋三保により地唄に改曲されており、享和元(一八〇一)年刊「新增大成系のしらべ」に初出する。その地唄を抜粋して作曲し直したのが本曲である。

茶の湯の語をつづつて男女の仲を歌った内容。「花は吉野山、紅葉は龍田」と名所を並べて、「茶は宇治」を読み出し、「都の辰巳」と、古歌「わか庵は都のたつみしかそすむよをうち山と人はいふなり」(古今和歌集)巻第十八・雑歌下、喜撰法師)を思わせる。「辰巳」から「廓は都の未申」と島原遊廓が京都の西南と方角にかけて廓の世界を詠み込んでいる。「数寄」は茶の湯などの風流で、「好き」をかける。「立てし」は評判になることをいう名を立てると茶を点てるをかけ、「濃茶の色の深緑」と茶の色の深さと、遊女と客の深い仲をかける。終始このような具合で、茶の世界と色事の世界を言葉が往還する技巧的な作詞である。「松の位」は太夫、「圃

い」も遊女の位、「床飾り」の床は茶屋の床の間と寝間の床をかけ、裏表から縁語で袱紗を導く。「捌けぬ」も袱紗捌きと恋の駆け引きの両方を言い、「柄杓」「茶杓」「釜」、茶の銘である「初昔」を出す。

この曲一曲が終わるまでにお点前をするなど、風雅な遊びもあつたという。

舞は山村流や榎茂都流に伝承され、いずれも舞の振りの中に、袱紗捌きや茶碗の扱いなどお茶の作法がいろいろと取り入れられているという。ただし、袱紗の扱いも、榎茂都流では結んでみたりするよう、艶っぽい女心の表現がある。

(所要時間) 一七分

(日本舞踊回付不成) 上方舞締 岡田万里子執筆

べんてんむすめのおのしらなみ

弁天娘女男白浪

河竹黙阿弥

○へえ。それでは、おめえ方、わっちの名を知らねいのかい？

△どこの馬の骨か知るものか！

○知らざあ言つて聞かせやしよう。

浜の真砂まごいと五右衛門が、歌に残ぬすつとこせし盗人の、種は尽きねえ七里が浜、その白浪の夜働き、以前を言やア江の島で、

ねんきねんき ちごがふちちごがふち ひやくみひやくみ まきせんまきせん あてあて こざらこざら
年季勤めの児ヶ淵。百味講で散らす蒔錢を、 当に小皿の
いちもんじいちもんじ さいせんさいせん せせ

一文子、百が二百と賽錢の、くすね錢せえだんだんに、悪事かみはのぼる上の宮、岩本院で講中の、枕探しも度重なり、

お手長講の札付きに、とうとう島を追い出され、それから若衆つつもたせの美人局、ここかしこや彼処の寺島で、小耳に聞いた音羽屋

の、似ぬ声色で小ゆすりかたり、名せい由縁ゆかりの弁天小僧菊之助たア、おれがことだ。



邦楽囃子（元々は長唄囃子や、歌舞伎囃子と呼ばれていましたが、現在では、様々なジャンルの音楽と共演しますので、一九七〇年代頃から、『邦楽囃子 ほうがくはやし』と呼ばれるようになりました。）邦楽囃子には、大太鼓を始め、蔭囃子で用いられる様々な楽器があります。代表的なものを、四拍子、と呼んでいます。能楽囃子から、邦楽囃子に用いられるようになった楽器群です。

四拍子（しびょうし）

笛（ふえ）・・・能管・篠笛

小鼓（こつづみ）

大鼓（おおつづみ）

太鼓（たいこ）



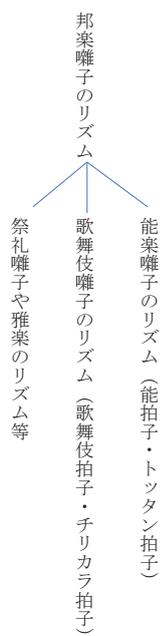
小鼓（こつづみ）

砂時計型の胴（桜、漆が塗られ、蒔絵が施されています）

馬の皮、麻紐（調べ）

小締め（こじめ）

両面の皮は、調べと呼ばれる麻紐で緩く組まれ、左手で握ったり、離したりして、音色をつくります。アフリカにも、トーキングドラムという、似た構造の楽器があります。小鼓は湿度を好み、胴や皮の組み合わせによって音が変わります。調整の大変難しい楽器ですが、大変美しい音色を持つ、精緻極めた楽器だと思えます。音色には大きく分けて、高音（タ）、低音（オボン）、があります。この2種類の音色を組み合わせて音を作り出します。この他の大きな特徴は「掛け声」です。声を出すことによって、表現の幅が広がります。



小鼓・さくら 附書

前奏

而

△
△
タ
タ
△
△
○_シ
○_シ

入

ス△
ツ
○_シ
ス△
タ
ス△
タ
ス△
○_シ
○_シ

分 冊

千ソ
カ
ラ
千ソ
○_ト
○_ト

ツ
タ
○

ツ
タ
○_シ
(休)

打
放
ツ
メ

○_ホ
ハ
○_ホ
ス
○_ホ
○_ホ
○_ホ
ハ
○_ホ
ハ
○_ホ
(休)

マ
タ
○

ス
○_シ
ス
タ
ス
タ
ス
○_シ
タ
○
(休)

井
ス
○

千ソ
カ
ラ
ス
○_シ
2回

ツ
タ
○

ツ
タ
○_シ

メ
イ
ヤ
知

ス
タ
ス
イ
ヤ
知



小鼓・さくら附書

今)

卍

キソ
カタ
ラタ
キソ
オト
オト

〇

スタ
スタ
スタ
スツ
オト

ミイナ

スツ
オト
スタ
スタ
タ
スツ
イヤ
タ

最初に戻す!

親子のための伝統芸能ワークショップ—ことば遊びとリズム遊びの表現—
参考リンク先

・ひふみ体操

<http://www.musubinokai.org/hifumitaiso.html>

・特定非営利活動法人日本伝統芸能教育普及協会 むすびの会 会報

<http://www.musubinokai.org/report.html>